

「戦争と平和」の舞台を訪ねて

人生と歴史への無限の教訓

ゆかりの地を回って少しは理解を深めたかな？

いうまでもなく、トルストイの『戦争と平和』は世界文学の最高峰に位置している大河小説である。浅学で文学的素養に乏しい自分がごとき者が、作品を論ずるには力不足も甚だしいことは自覚している。それでも、翻訳者の違う原作を2回読み、制作会社の異なる映画を2回鑑賞し、さらに現実に小説の舞台を訪れた者としてのルポ記事は、原作者もきっと認めてくださるに違いない。

そんな思いを下支えとしてこれからの文を展開していきたい。読者の皆さまのご指摘やアドバイスをいただければ望外の幸せです。

☆

☆

☆

☆

☆

☆



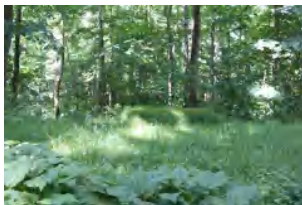
トルストイの邸博物館

トルストイの邸博物館を訪れた私は、最初にトルストイが生まれ育ったヤースナヤ・ポリャーナ（「明るい林間の空き地」との意）に足を伸ばした。

モスクワから南下すること約200キロ。「トルストイの邸博物館」は、入り口の門から美しい白樺の並木を通り、新緑の木々と花々に囲まれた中にあった。白い板壁の2階建ての家の部屋が、今は博物館となって当時の模様を伝えている。トルストイはここで生まれ育ち『戦争と平和』をはじめ多くの作品を執筆した。

モスクワから南下すること約200キロ。「トルストイの邸博物館」は、入り口の門から美しい白樺の並木を通り、新緑の木々と花々に囲まれた中にあった。白い板壁の2階建ての家の部屋が、今は博物館となって当時の模様を伝えている。トルストイはここで生まれ育ち『戦争と平和』をはじめ多くの作品を執筆した。

残念なのは、家の中は写真撮影が一切許されていないことだった。貴重な文学遺産の管理のためにはやむを得ないのかもしれない。あちこちに管理人（監視員）もいた。



トルストイの墓

無名を好み死後についても遺言したというトルストイの墓が、そこから歩いて5分ほどの森の中にあった。幅1メートル、長さ2メートル、高さ50センチほどの長方形に土が盛り上げられ、上を雑草が覆っていた。文字通り、世紀の文豪にしてはきわめて質素な墓だった。

翌日はモスクワ市内にあるトルストイ博物館へ。1階建ての各部屋ごとに『復活』『アンナカレーニナ』『戦争と平和』関連のオリジナル原稿や、校正のためペン字で手を入れた活字紙面が展示されていた。



新緑の白樺林が続く

上下2巻に及ぶ長編には、あらゆる哲学や思想、箴言が含まれていて、とても簡単に論ずることはできない。ここでは自分が特に感銘を深くした点や部分だけを上げてみたい。

- I. 戦場で倒れたアンドレイが、空を見上げながら人生について思考をめぐらす情景
- II. ナポレオン軍に捕らえられたピエールが、流刑地のシベリアで農民カタラーエフとした語らい
- III. 13歳で登場するナターシャの瑞々しさと恋に悩む姿。やがて結婚し子だくさんの良妻賢母になっていく経過
- IV. ナポレオンのモスクワ侵攻と炎上、そして冬将軍の中での絶望的な退却行
- V. 小説の各所で「戦争とは?」「平和とは?」「人生とは?」「死とは?」・・・人間社会の根源的な課題への言及

以下、小説の流れに沿って原作からそれらの箇所を＜世界文学全集 20巻 21巻 集英社版 原久一郎訳＞から引用してみたい。

- I アンドレイが草原に傷つき倒れて空を見つめながら考えつづやいた言葉。ただ彼の上には高い空——晴れてこそいないが、高い空と悠々と過ぎゆく灰色の雲があるばかりであった。
「なんという静かな、平和な、崇高なことだろう・・・」



(高校時代、最初に本書に目を通したときの自分の読書感想文にこの部分が引用されている。そう、戦争の悲惨と戦場の喧騒に対して、見上げた空のなんと高く悠久なことか。空を見上げているなかで、現実の世界も見下ろせるような境涯にもなっていくことが感じられる)

左：エルミタージュ美術館に展示されているボロジノ戦争の絵画

- II 「ただ一人、プラトン・カラターエフだけはピエールの心にもっとも強烈で貴重な追憶として、またロシア的で善良で円満なもの一切の、権化として永久に残ったのである」
(第2巻の最後の解説部分で、翻訳者は「カラターエフをロシア的円満の象徴」としている。
実際にカラターエフは小説の主人公の一人・ピエールの心を根底から変えていった)

- III ピエールの登場 ナターシャと初めてのダンスを踊る、小さなレディ・・・
「この日から、アンドレイ公爵は、ナターシャの許婚者として、ロストフ伯爵家へ出入りするようになった」
「ナターシャは、注意深く相手の手をとると、その上に顔をかがめて、かすかに唇をつけて接吻し始めた。『おゆるしく下さいませ!』・・・『僕はあなたを愛しています』とアンドレイは言った」
「ナターシャは1813年の春の初めに＜ピエールと＞結婚し、1820年にはすでに三人の女の子と一人の男の子を持っていた。・・・今度は自分の乳をやって・・・すべてが母親化して

いった。・・・彼女の魅力の変化・・・家庭では夫に対して、奴隷としての地位に甘んじていた」

(制作会社の異なる 2 本の映画で見たヒロイン・ナターシャは、どちらも原文の通りはつらつといて瑞々しく惹きつけられたものだった。翻訳者の解説によれば、「ある意味では、ナターシャは、トルストイの描いた女性の理想像と言えるだろう」としている)

IV 「ひとたびこうした衝撃を受けたフランス軍は、その勢いでモスクワまでなだれ込むことができた。けれども、モスクワにおいては、ロシア軍の新しい努力がなくとも、ボロジノで受けた致命傷のために、フランス軍は壊滅しなければならない運命であった。ボロジノ戦役のもたらした直接の結果は、ナポレオンが意味もなくモスクワを逃亡して、旧スモレンスク街道づたいに総退却をしたことと、五十万の侵入軍の全滅と、はじめてボロジノで、精神力のすぐれた敵軍に打ちのめされたナポレオンのフランス帝国の滅亡とであった」

「が、モスクワは空虚であった。そこはまだ以前の人口の 50 分の 1 ほど住民が残留していたけれど、しかしモスクワは空虚であった。女王のいない崩れかかった蜜蜂の巣が空であると同様、モスクワはまったく空虚だった」

「モスクワは住民に焼かれた——これは事実である。しかしながら、そこに残った住民ではなく、退去した住民によって焼かれたのである」

「ナポレオンはモスクワ付近の華々しい戦勝の後に、意気揚々とモスクワへ乗り込んだ。戦場が自軍の手中に落ちたところからいって、勝利には一点の疑いもありえなかった」

「攻勢に出れば負けるだけだということくらい、彼らも解しているはずだ。
忍耐と時間——

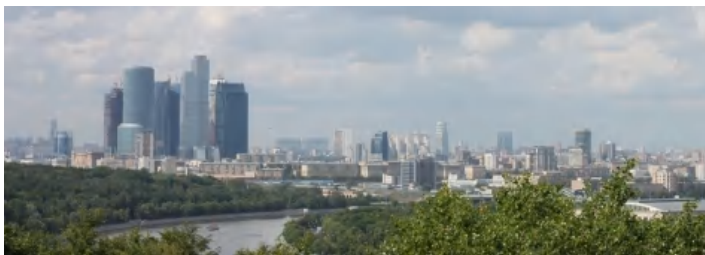
これが私の戦場の勇士だ！」とクトーゾフは考えた。林檎は青いうちに採ってはいけない」

「あのきちがいじみたヒステリックな彷徨。当時のクトーゾフさえ思いも及ばなかった、フランス軍の全滅を実現させたのである」

「フランス軍のモスクワ退去という報告から戦争の終わるまで、クトーゾフの全活動は、ただ一事に集中された。ほかでもない。権力と機知と懇願によって机下の軍隊を抑制し、無益な正面攻撃や、迂回運動や、自滅しつつある敵との衝突を回避させたことであった」



クトーゾフの像

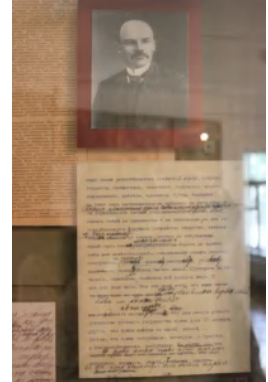


左：雀が丘から望む現在のモスクワ市内

(第三編でトルストイは戦争の勝利者と敗者についての解説している。——ボロジノの会戦と、それに続くフランス軍のモスクワ占領、その後、一戦もまじえずに行われた

フランス軍の潰走とは、歴史上のもっとも教訓的な現象の一つである。モスクワ近郊の百姓たちが、各自の乾し草をみんな焼き捨て、フランス軍に渡そうとしなかったからである。

10月28日に霜が降り始めて以来、フランス軍の潰走はいよいよ悲劇的な性質を帯びてきた。兵士たちは凍え死んだり、焚火のそばで焼け死んだりしている。なのに皇帝や王や大公たちは、深々と毛皮の外套にくるまり、略奪した財宝を持って、幌馬車に乗ってゆくのだった。彼らは軍のことを案じ煩っているようなふりをしていたけれど、その実、自分一個のこと——どうしたら少しも早く逃げ出して、身を全うすることができるかということ——だけしか考えなかった……まさに戦争の不条理と人間の心の奥を描いている)

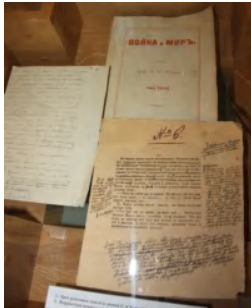


V 「ねえ、あなた」とリーザは一人の将軍のほうへ顔を向けて同じ調子で 筆跡が残る各種文書語をついだ。「たくの主人はあたくしをすてて戦地へ行こうとしているのでございますの。あたくしをすてて戦地に死ににゆこうとしておりますの。ほんとに、何のためにこんなうとましい戦争などというものが行われるのか……」

「……おれが目標なのかしらん？ おれのほうへ駆けてくるのだろうか？ 何のためだろう？ おれを殺しにか？ おれを、みんなから熱愛されているこのおれを？」

「……欲望のうちにではなくて自分の心中に幸福をお求めなさい。幸福の泉は外部からではなく、内部にあるのですよ……」

「幸福とは他人のために生きることにある……」



やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れ果てた者や、ためらっている者の上に、小雨がしとしと降り始めた。「おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！やめてくれ……いい加減正気に返ったらどうだ！お前たちは一体何をしているのだ？」。こう言っているかのようであった。

「戦争と平和」の校正原稿（第四編では、戦争、殺し合いの不条理、生死について解説をしている。トルストイは、文明というものが進めば進むほど、むしろ人間生活をゆがめ、魂の生活を損ねるものだという結論を抱くようになった。昨今の時代状況と人間自身の幸せについて思うと、私も心から同感する一人である）

Д Д Д Д Д Д

侵攻したナポレオン軍がモスクワ市内を遠望したという雀が丘に立ってみた。高さ 100 ほどの丘からは確かにモスクワ市のほぼ全貌を望むことができた。丘の上の広場には数百人の観

光客やみやげ物店で賑わっていた。真っ白のロングドレスの新婚の花嫁が新郎と熱いキスを交わし記念写真におさまっているカップルをいくつも見た。これこそ、先達が戦争で命を犠牲にしながら勝ち得てきた尊い平和のありがたさだと思う。

(「エッセイ・コラム」欄「6月の花嫁 in Russia」に記事と写真と載せています)



半世紀前、高校時代の夏休み前に、国語担任の先生から言われた。「世界文学の大作を読みなさい。今はすべてわからなくてもいい。自分が偉くなったような気分になるよ。きっと・・・」。そんな言葉に刺激されて学校図書館から借りてきて読んだのが『戦争と平和』だった。

『戦争と平和』は 1865 年から 1869 年にかけて発表された。19 世紀前半のナポレオンのロシア遠征（ロシアでの呼称は「祖国戦争」）などの歴史を精緻に描写しながら、ロシアの貴族社会や人々の多様な生き様を綴っている。登場人物は 500 人を超えている。

今回のロシア訪問を前に、私は地元の図書館から上下 2 巻を借り再び読んでみた。だが、難しさはそれほど変わらなかった。今も消化不良は否めない。でも、この作品の舞台めぐりは、偉くなったような気持ちにはならなくても＜年のせいかな？＞、少なくとも作品への関心をもう一歩深め、心もちよっぴりと豊かになったような気がする。

ゆかりの地を回って少しは理解を深めたかな？



トルストイ邸の池に咲く睡蓮